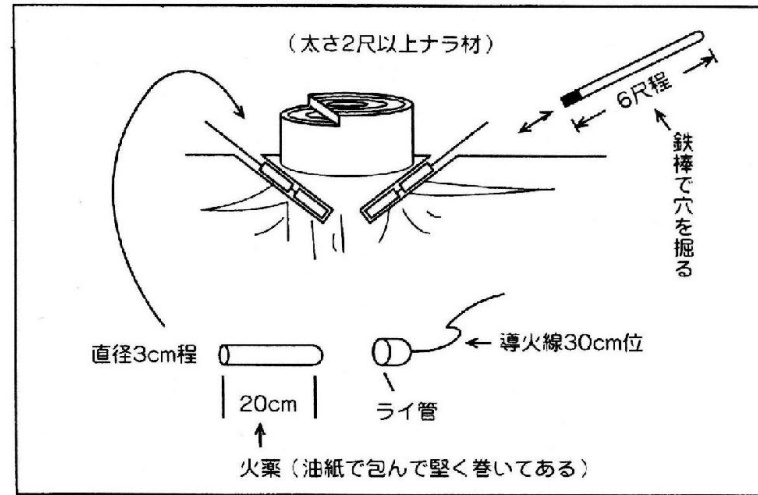


(略) 昭和26年頃になり、馬が1万〜2万円で購入され始める(自転車1万2千円)と同時に火薬抜根が始まり、当時火薬取り扱い責任者として林さん(網走支庁)が柳谷さん宅に泊まって立木調査し、材積量、本数によって火薬が割り当てられ、使用火薬本数、抜本本数など毎日報告が義務づけられた。

直径2尺ほどの抜根の場合で火薬5〜6本使い、導火線に点火すると同時に30〜50メートルほど逃げて、爆発の本数を聞いてから近寄って確認、中には裂けてしまい、根が抜けなかったこともあったという。抜けた穴は手で埋め戻すか、馬によるゼリ(ちり取りのおおきなもの)によって土を埋め戻した。

昭和30年頃からレーキドーザが入り、抜木作業は飛躍的に進んだ。



火薬抜根の方法

「富丘百年史」掲載の火薬抜根方法図